The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	フィリピン・セブ広東系華人の境界透過性 ： 血縁、地縁、言語を越える
Author(s)	敖, 夢玲
Citation	アジア太平洋論叢. 2022, 24, p. 275-297
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/95094
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

アジア太平洋論叢　24 号 (2022)　研究ノート
Bulletin of Asia-Pacific Studies vol. XXIV pp.275-297. (Research Notes)

フィリピン・セブ広東系華人の境界透過性
―血縁、地縁、言語を越える―

Boundary Permeability of Cantonese-Filipinos in Cebu, the Philippines: Beyond Blood, Geography, and Language

敖夢玲*
AO Mengling

Abstract

This essay is a case study about Cantonese-Filipinos in Cebu, Philippines. The essay discusses boundary permeability of Cantonese-Filipinos based on their life stories. Data was gathered from fieldwork conducted in Cebu in 2019. Using life stories of Cantonese-Filipino as examples, the essay focuses on how ethnic Chinese can be called Cantonese-Filipinos, and how they are able to distinguish "the others" through this boundary.

Based on the narratives of life stories of Cantonese-Filipinos, we are able to find out that the boundary of Cantonese-Filipino is permeable. For one thing, the category of "Cantonese-Filipino" is flexible and this can be expanded and shrined according to situation. Also, if the influence of the “subordination” of identity of Chinese females, the "impurity" of Chinese-mestizos, and the principle of “place-of-birth-centrism” are considered, the boundary of Cantonese-Filipinos can be crossed.

In conclusion, the boundary between the category of "Cantonese-Filipinos" and the others is permeable, less emphasizing of internal characteristics, and more susceptible to external influences.

Keywords: Boundary Permeability, Cantonese-Filipinos in Cebu, Cebu Cantonese Association, Chinese-Filipinos in the Philippines

はじめに

１．研究背景

本稿は、フィリピンにおける広東系華人(1)の境界透過性について、セブ市の事例に基づいて検討しようとするものである。

広東省は中国華南地域に位置し、長い海岸線を有しており、古くから海外との貿易と人口流動が盛んであった。特に中心都市としての広州は、古代中国の南海貿易の中心地として発展し、清代中期に対外開放の唯一の「窓口」となって欧米諸国と貿易を担った。アヘン戦争以後、広州 1 港のみの貿易システムは終焉したものの、広東省と外国との往来は絶えなかった。1860 年の「北京条約」によって、中国人労働者の募集と渡航が承認され、多くの労働者が「華工」として外国で働くようになった。このなかで多数を占めたのは、広東省出身者であった（陳 2010）。中国史全体を見渡しても、広東省は海外への移住が最も多い地域であった。庄国土の推計によると、2018 年の段階で広東系華人の割合は、世界華僑華人総人口のうちの 43%を占め、次いで福建省出身者が 27%を占めている（庄 2020: 26）。

本稿で取り上げるフィリピン・セブ広東系華人は、出身地から見ると、広東省からフィリピ

* 大阪大学大学院人間科学研究科・博士後期課程

ン諸島に移住した中国系移民とその子孫である。広東系華人の移住先は、北米大陸ではカナダとアメリカが中心で、アジアではマレーシア、シンガポール、ベトナム、インドネシア、タイに広がっている（龚 2003: 156）。これらの国と違って、フィリピンは広東系華人の主要な移住先ではない。広東系華人の地位を端的に表現するとすれば、「二重少数派」という語がまず思い当たる。フィリピン社会のなかで、中国系の住民は総人口の約 1.2%から 1.5%にとどまるマイノリティーである（Teresita Ang See 2005: 763）。そうした華人社会のなかで、華人のルーツは、福建省が約 80％、広東省が約 10％となっている（Teresita Ang See 2005: 763）。広東系華人は人口面から見ると少数派のなかの少数派であり、経済や文化などの面でも、フィリピン社会、華人社会の周縁に位置づけられているのである。

こうした広東系華人の周縁性は、学術的な研究での扱いにも見られる。これまでのフィリピンの華人研究には、二つの明らかな中心がある。一つは福建系華人という中心(2)であり、もう一つはマニラという中心である。フィリピンの首都であるマニラの福建系華人が、フィリピンの華人全体を代表してきたのである。もちろん、マニラ首都圏に居住する福建系華人を対象とした研究がフィリピン華人社会全般に共通する特徴について詳細な考察を行い、貴重な成果を生み出してきたことは否定できない。しかし、福建系華人（特にマニラ首都圏）の移住と定住の経験によって、フィリピンの華人社会全体の経験を代表させることは、中心に見られる諸特徴が、フィリピンの華人社会全体に遍く見られるとの誤認を生み出す原因ともなる。マニラ地区、特にチャイナタウンは、華人の人口密度が高く、華人と非華人系フィリピン人の間には距離感がある。一方、マニラ首都圏以外の華人は、非華人系フィリピン人とのインタラクションがより顕著で、通婚も多い（Chinben See 1988）。マニラ首都圏以外に在住する華人、そのなかでも「二重少数派」である広東系華人の経験を観察することにこそ、フィリピン華人社会の構造を読み解く鍵が存在していると言える。広東系華人を対象として「周縁」の経験を研究することで、福建系華人を対象とした研究で導かれたフィリピン華人社会「全体」に関する知見を広げることになる。したがって、広東系華人を対象とした研究が必要なのである。

２．先行研究

フィリピン在住の広東系華人を対象とした研究は、管見の限り、2 つに限られている。

市川信愛（1980）は、セブ市において広東系華人を対象とした研究をしている。「宿務廣東會館」（Cebu Cantonese Association、以下、「セブ広東会館」と表記）の 1979 年度会館会務報告書を資料とし、現地調査の結果と合わせて、セブ広東会館の歴史およびセブ市における広東系華人と中国との交流活動を整理した。この研究は、多くの情報を含む貴重な研究である。

また Caoline Cheong（1983）は、マニラチャイナタウンに住む広東系華人を対象に、彼らの言語、宗教、親族関係、団体、食文化、および学校教育などについて考察している。彼女は、当時のマニラチャイナタウンに居住する広東系華人が、より「純粋な」華人社会のなかで暮らしており、華人文化と広東の文化に容易に接触できたことを指摘している。Cheong の研究には、内部の人の生活状態が詳しく描かれており、より「純粋な」広東系華人社会の構成を知ることができるが、一方で、広東系華人社会の閉鎖性を指摘している。そして、Cheong は、華人学校のカリキュラムに、フィリピンの歴史、社会文化、価値観に関する授業を追加し、広東系華人をフィリピン社会に融合していくことを提言している。

フィリピン主流社会との融合は、戦後、フィリピン華人にとって、重要な課題になった。華人は定住を始めてから、現地の言語、宗教、文化の影響を受けて、徐々に現地の慣習になじんでいった。一方、1946 年にフィリピンが独立して以降、一連のフィリピン化政策の施行が起こ

り、特に、1970 年代から華僑学校のフィリピン化は、戦後フィリピンで生まれ育った華人世代に直接影響を与えた。フィリピン政府や主流社会から政治的、経済的、文化的な影響を受けているので、1960 年代から施振民と洪玉華などを代表とする研究者・社会活動家たちは、フィリピン華人社会のなかでの華人とフィリピン主流社会の融合の必要性を主張した。彼らは、Pagkakaisa Sa Pag-Unlad (合一协进会 1970〜1981) と Kaisa Para Sa Kaunlaran (菲律濱華裔青年聯合会 1987~)という団体を中心に、フィリピン華人社会についての研究と文化活動を通して積極的な「華菲融合」を推進している。その後、1975 年から華人の帰化規制が緩和され、多くの華人がフィリピン国籍を取得し、正式にフィリピン国民となった。これ以降、現地化の傾向は一気に加速することとなった。その結果、フィリピン華人は、政治的アイデンティティに関してはフィリピン国民であると認識しており、文化的アイデンティティに関しては、フィリピンという国家の枠組みのなかで華人文化を保存して続けていると考えられている（陳 1968；施 1992；Teresita Ang See 1997）。つまり、このようなフィリピン華人アイデンティティは、文化的な華人アイデンティティを維持しつつ、フィリピン国民としての政治的アイデンティティを強調するものである。マニラ首都圏は、フィリピンで華人が最も多く集まる地域で、特にチャイナタウンを中心に、数多くの華僑学校、中国語の新聞社や華人団体が存在する。 マニラ首都圏在住の華人にとっては、華人文化との接触し、文化的な華人アイデンティティを維持することはより容易であると考えられる。しかし、マニラ首都圏以外の都市では、文化的な華人アイデンティティを維持することが難しくなっているかもしれない。

マニラ首都圏以外の都市における華人団体や華僑学校は、数が少なく、華人文化の保存と維持という機能が弱くなっている（Teresita Ang See 2004）。筆者の現地調査によると、本稿で取り上げるセブ広東系華人は、セブ華人社会であまり活躍しておらず、また、フィリピン全土の広東系華人団体の連合組織である「菲律濱廣東僑團總會」（Philippine Federation of Filipino Cantonese Association）との連絡も中断しているため、連合組織においてセブ広東系華人は「いなくなった華人グループ」だと思われている。このことは、広東系華人がセブで置かれている立場から理解できる。福建系華人と比べると、広東系華人は職人と労働者の傾向が強く、あまり裕福と言えない。また、広東系華人男性とフィリピン女性との通婚家庭が多く、経済的に余裕がない場合は、子供たちを華僑学校には通わせず、フィリピンの公立学校に通わせ、フィリピン人として育てることが一般的になる。セブ広東系華人は、よく「華人性」に欠けると言われる。つまり、フィリピン国民という政治的アイデンティティを認めるともに、言語、宗教、風俗、文化などもフィリピン主流文化に融合する傾向が強くなると、広東系華人にとって、文化的な華人アイデンティティを維持することは難しくなる。

このような背景から、マニラ首都圏以外の華人、特に二重少数派である広東系華人にとって、安定したエスニック・アイデンティティを維持することは簡単ではない。このため、広東系華人を探しだすことは難しい。福建系華人やフィリピン人と区別するのが困難だからである。したがって、フィリピン広東系華人に関する研究では、誰が広東人かを問うこと自体が重要な作業となる。つまり、「広東系華人と呼ばれるのは誰なのだろうか」を問うことになる。

広東系華人と呼ばれる人々は、その名前を付けられたグループに分類され、他者と区別されている。ある人はそのグループに引きつけられ、ある人はそこから排除されることで、広東系華人というグループは形成される。ここで、エスニック・グループに関する議論をもとに考えてみたい。フレデリック・バースが主張する民族境界論（Ethnic boundary theory）によると、エスニック・グループは、エスニック・バウンダリーとともに主観的に構築される（Barth 1969）。エスニック・グループが形成され、維持されるのは、エスニック・バウンダリーが構

図１ 本稿に登場する地点（筆者作成）

築されているからである。「広東系華人と呼ばれるは誰なのだろうか」という問題は、広東系華人という「エスニック・グループ」の境界がどのように構築されているのかという問題とかかわる。彼らがどのように「自己」と「他者」（例えば、福建系華人やフィリピン人）を区別するかを論ずることで、フィリピン華人社会においてどのように境界が構築されてきたのかを明らかにしていく。

ただし、中国社会に関する研究の文脈を参照すると、本稿で取り上げるセブ広東系華人は、「エスニック・グループ」としてではなく「カテゴリー」として論じるのが適切である。王崧興は、中国社会の構造的特徴を「関係あり、組織なし」という表現で説明している（王崧興 1987: 37）。これは、中国社会には、さまざまな「カテゴリー」や「ネットワーク」が存在し、状況に応じて組織化された集団を形成しているという意味である。ただし、同じ「カテゴリー」に基づいて拡張された関係ネットワークを結成できるが、必ずしも組織化された集団を形成できるわけではない。例えば、広東省からセブ市に移住した人は、省を基準とした「カテゴリー」によって、「広東系華人」に分類され、同じ「カテゴリー」の人々と「同郷」という関係を結ぶことができる。さらにそこから「同郷」のネットワークを拡張していくと、組織化された「広東系華人」という集団を形成できる。しかし、もしこの「同郷」という関係が個人間の繋がりを形成するにとどまった場合、「広東系華人」という「カテゴリー」に基づく集団を形成することはできないと考えられる。

本稿は民族境界論を参考にして、「広東系華人」という「カテゴリー」の境界を論ずる上で、「境界透過性」（Boundary Permeability）という概念を援用する。境界透過性とは、ある境界が、別の境界に影響を与えることを許可する程度を指す（Hall & Richter 1988）。境界透過性が高ければ、特定の外部からの影響を許容する。一方、境界透過性が低ければ、強い境界を維持し、不要な要素を排除して外部からの影響を許容しない（Kreiner, Hollensbe & Sheep 2006）。

以上を踏まえて、具体的に以下の 4 点を分析する。

1．フィリピン華人社会で、「広東系華人」と呼ばれる人が、そう呼ばれる理由、あるいは判断基準は何か。
2．これらの基準に基づいて、「広東系華人」というカテゴリーはどのように構築されるのか。
3．「広東系華人」と呼ばれる人は、「広東系華人であること」をどのように理解しているのだろうか。彼らは、本当に「広東系華人」と自認しているのか。それとも他の選択肢がないために、この呼称を受け入れるしかないのだろうか。
4．広東系華人というカテゴリーはどのような境界透過性を持つのだろうか。

これらの課題に即して、本稿では、市川の記述も援用しつつ、セブ広東系華人の移動と定住経験に基づいて、広東系華人というカテゴリーがどのような境界透過性を持つのかを考察する。本稿の資料は、筆者が 2019 年 3 月～2020 年 2 月にフィリピンで行った現地調査（筆者の調査地には、広東系華人が集住する都市であるバギオ市、セブ市、イロイロ市、ダバオ市の 4 つが含まれるが、本稿ではセブ市での調査結果を中心に検討する）に基づいている。以下、まず第I章において、セブ市における広東系華人と広東会館の歴史と現状を説明する。その次に第II章で、5

つの事例に基づいて、広東系華人のライブストーリーを述べる。最後に、第III章では、５つの事例について分析し、彼らが「広東系華人であること」に対する理解および「広東系華人」というカテゴリーの境界透過性について考察する。

I　セブにおける広東系華人の概要

１．華人社会とセブ市

上述したように、現在フィリピンに住んでいる華人が 100 万人以上と言われている(3)。その半数以上はマニラ首都圏に居住しており、他の華人はセブ市、イロイロ市、ダバオ市などの都市に居住している。本稿で現地調査を行ったセブ市はそのなかの一つである。

セブ市はフィリピンの第二の大都市で、フィリピンの中部に位置する、ビサヤ諸島で最も重要な商業、工業、観光業、航空輸送業の中心地である。セブ市の人口は約 96 万人（2020 年）(4)で、華人の人口についての具体的な統計は存在しないが、セブ市の人口の 10%と言われている（宮原 1998）。約 10 万人の華人がセブ市に住んでいて、華人の人口比率はフィリピンの都市のなかで一番高いと言われている。また、中国人がセブと貿易を行ってきた歴史はとても長く、スペインの植民者がフィリピンに入る前からであった。セブの華人は「セブにはマニラのようなチャイナタウンが存在しないが、セブにもチャイナタウンがある――それは、セブ市自体がチャイナタウンだから」(5)だと述べる。

セブ華人社会が発展したのは、スペイン植民地期の 1860 年にセブ港が開放され、サトウキビやタバコ、ココアなどの植物が導入され、大量に栽培されたことに関連している。特にサトウキビの製糖業の発展は、19 世紀後半には蔗糖がセブ輸出の主要品目になった。セブの発展は華人の移住を呼び寄せた。1860 年以前、セブ市の華人（商人と職人）は 20 人を超えなかったが、1894 年までに、華人の人数は 1,400 人から 1,500 人に増え、セブ市の人口（14,099 人）の 7%を占めている（Fenner 1985）。しかし、裕福な華商はごく一部に限られ、華人は一般的には小さな小売店の店主や労働者、職人であった。

20 世紀に入ってから、アメリカ植民地政府はフィリピンで自由貿易政策を推進した。そして、第一次世界大戦中には国際市場におけるフィリピンの原料と製品に対する需要も増えた。そこで、セブ在住の少数の華人は、小規模な小売店を営むことで少しずつ富を築いていった。例えばフィリピンで有名な華商の呉奕輝（John Gokongwei）は、まだ 10 代であった 1940 年代に自転車に乗ってセブ市内で石けんや針の糸などの雑貨を販売することに始まり、そこから一歩ずつ巨大な商業帝国を作り上げた（Yvette Fernandez 2011；Meah Ang See 2018）。もちろん、すべての華人がビジネスでこのような成功を収めているわけではない。フィリピン独立以降、実施された一連のフィリピン化政策によって、華僑の経済活動は制限されるようになった。当時ほとんどの華人はフィリピン国籍を持っていなかったので、小売業を中心に営む華商は大きな衝撃を受けた。一方、これは華人が担う産業の転換を促した。また、1975 年にフィリピン政府が華人への帰化制限を緩和したことによって、多くの華人がフィリピン国籍を申請し、フィリピン国民になった。現在、セブ在住の華人は基本的にフィリピン社会への融合が進んでいると指摘されている（Teresita Ang See 2004）。

２．セブにおける広東系華人

2.1　フィリピンの広東系華人

広東人がいつからセブ市に移住したのかについては、明確な歴史的記録はないが、スペイン

人が侵入する前にすでに広東人の居留者がフィリピンに来て生計を立てていたと言われている。スペイン植民地期の初期の 16 世紀後半、広東省潮州饒平県出身の林鳳をリーダーとする「海賊」グループがルソン島北部のパンガシナン州に上陸し、その後北上して山岳地帯に入ったという伝説がある（徐 2015）。

また、広東系華人に対する古い呼称として「マカオ」(6)がある。「マカオ」という呼称は、珠江の最下流域に位置し、広東省珠海市に接するマカオ（Macao）という地名に由来しており、マカオ港からフィリピンに来た中国人を指す。マカオは 19 世紀に「華工」（中国人労働者）の海外出稼ぎが合法化される前に、長期にわたり密航船と「猪仔貿易」（猪は豚という意味がある、猪仔貿易は中国人労働者に対象としての奴隷売買）の出発港となっていた（張 1996）。当時、マカオから出国したのは広東人で、福建人は主に泉州と厦門から出発した。「マカオ」という呼び方からは、出国港によってフィリピン華人のなかで広東人と福建人が分けられていることがわかる。しかし、1840 年のアヘン戦争以降、香港がイギリスの植民地になり、自由港として開放されてから、多くの広東人が香港から出発した。もちろんそこには一部の福建人も含まれている。現在、「マカオ」という呼称はあまり使われなくなり、広東系華人は、閩南語を中心とした文脈のなかでは一般に閩南語で「kńg-tang-lâng 」（広東人）と呼ばれている。

広東系華人はマニラ首都圏に集中している。1850 年に広東系華人は「馬尼剌廣東會館」（Manila Cantonese Association）を設立した。これはフィリピン史上初めて設立された華人団体の一つである。また、1884 年に設立された「菲律濱龍岡公所」（Filipino Chinese Loong Kong Kung So）のように宗親会もあった。 20 世紀初頭、アメリカ植民地期に入ると、例えば、鶴山同郷会（1924 年～）、潮州同郷会（1935 年～）、中山同郷会（1950 年～）など、さらに小規模な地域・市・県単位を基準として会館が組織された。戦後には、「菲律濱廣東僑團總會」（Philippine Federation of Filipino Cantonese Association）も結成された(7)。これはフィリピン全土の広東系華人団体の連合組織である。

2.2　セブ市における広東系華人

マニラ首都圏の状況とは異なり、セブ市には、アメリカ植民地期以降、広東系華人が徐々に移住し始め、1924 年になって初めて広東系華人団体が設立された。この団体は 1926 年にセブ広東会館と改称され、セブ市で唯一の広東系華人団体となった。セブ広東系華人の第一世代の多くは、セブ広東会館の会員である。第二世代や第三世代のなかには入会しない人がいるが、少なくとも会館の活動に参加する。セブ広東系華人の歴史と現状は、セブ広東会館と繋がりがあると言える。 以下では、セブ広東会館の歴史と現状に基づいて、広東系華人の状況に関する分析を試みる。

まず、セブ広東会館について歴史を説明する。市川（1980）によると、セブ在住の広東人は、セブ広東会館と広東語で授業を行う「中山第二小学校」（華僑学校）を 1924 年に設立した。当時、特定の活動場所を有しておらず、活動ごとに一時的に場所を借りていた。1926 年には、同郷会の全体大会で土地を購入し、マナリリ街（Manalili St.）に集会所を設立した。この際、団体の名称は「百粤連合会」から「宿務広東会館」に改称された。市川（1980）では、セブ広東会館の設立年は 1924 年となっていたが、筆者の調査で見つけだした会館の歴史紹介資料には、セブ広東会館の設立年は、会館を建設し、「宿務広東会館」に改称した 1926 年であると記載されている(8)。広東会館への入会者や「中山第二小学校」への入学者が増えるにつれて、会館は規模を拡大する必要にせまられた。再び資金集めをして土地を買い、1936 年にスドロン街

（Sudlon St.）に新しく建てられた会館は現在でも使用されている。第二次世界大戦中、広東会館と学校の活動は一時休止したが、戦後、広東系華人の努力によって徐々に活動が再開された。セブ広東会館設立当初の目的は、広東系華人コミュニティに奉仕することであった(9)。しかし1970 年代から華人はフィリピンの主流社会に融合され、中華人民共和国とフィリピンも1975 年に外交関係を樹立した。セブ広東系華人も会館の目標を修正し、華人社会の安定を図るだけでなく、フィリピンと中国の交流も行うようになった。1975 年に中国とフィリピンが外交関係を樹立した時、セブ広東会館は中華人民共和国の国旗を掲げ、フィリピンにおける中国大使館と良好な関係を維持し続けようとしていた。中国領事館がセブに設立された 1995 年に、中国建国記念日を祝うイベントも初めてセブ広東会館で行われた(10)。

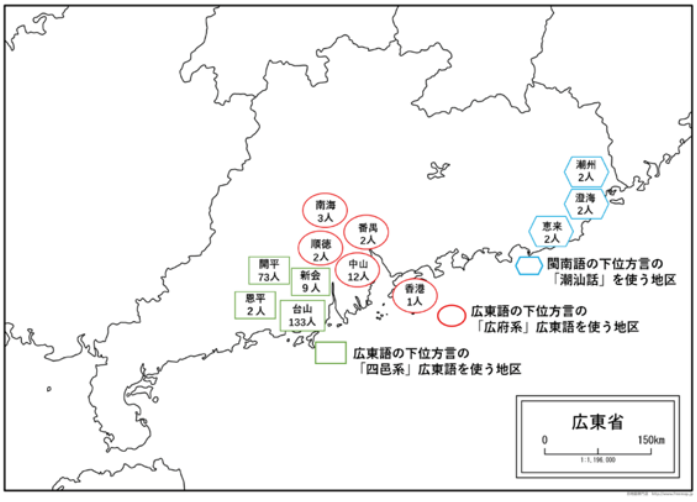


図２　セブ広東会館会員の出身地（セブ広東会館の会員資料（1950 年～1995 年）に基づいて筆者作成）

次に、セブ広東会館の会員について説明する。1926 年には、約 211 名の広東系華僑が入会した。入会の条件については、まず、第一世代の広東系華人か、またはその親族（特に男性の親族、例えば配偶者と子供）でなければならなかった。そして会員申請書を作成し、二人の会員の紹介を受け、理事会の審査を通過すると正式に会員になることができる(11)。

セブ広東会館の会員について、現地調査におけるインタビューと、1950 年から 1995 年までのセブ広東会館の会員資料(12)を基に、出身地、職業、住所、性別を整理した。具体的には以下の通りである。

1. 出身地（図２）：会員の 80%以上は広東省の「四邑」地域（台山 49.81%、開平 27.34%、新会 3.37%、恩平 0.75%）の出身である。そこでは広東語の下位方言である「四邑系」広東語を使用される。次に広東語の下位方言である「広府系」広東語を使う中山、順徳、番禺と南海が続く。最後に、ごく一部の会員は、閩南語の下位方言である「潮汕話」を使う広東省の潮州、澄海、恵来の出身である(13)。
2. 職業：経営者は少数で、職人と労働者の傾向が強く、特に料理人が多い。業種は工業系よりも商業系の傾向が強く、パン屋、飲食店、旅館、雑貨屋が中心である。その他に、保険会社従業員、教師、医者と「鉄打医師」（中国伝統医学の整骨・推拿師）などもいる。
3. 会員の住所：基本的にはセブ市と周辺の町である。他には、ミンダナオ島北部のカガヤン・デ・オロ（Cagayan de Oro）やブトゥアン（Butuan）なども含まれる。
4. 性別：267 人のうち 214 人が男性で多数を占める。女性は 16 人、37 人は未記入となっている。

前述のように、セブ広東系華人の第一世代の多くは広東省の農村出身で、セブ市に移住後は

職人や労働者として働いており、主に商人が中心の福建系華人より裕福と言えない。 また、20 世紀初頭のアメリカ植民地時代には、華人の男女比が 40：1 となっていることからわかるように華人女性は少なかった（Teresita Ang See 2004: 124）。この場合、広東系華人男性はセブで広東系華人女性や福建系華人女性と結婚することや、広東省に帰って結婚することは容易ではなかった。したがって、セブ広東系華人の第一世代は、福建系華人との結婚ではなく、フィリピン人女性との通婚が一般的になり、彼らの子孫には混血児が多い。

21 世紀に入る前後に、広東系華人第一世代／第二世代は、高齢のため会館の管理に参与しなくなり、広東会館はメンバーが不足し、運営に関する持続的な問題に直面している。このため、会館理事会はより若い混血児の世代が会館の管理に参加するよう積極的に奨励している。現在の会館理事会のメンバーを例にとると、通婚家庭出身者は 90%以上を占めている(14)。もちろん、通婚家庭出身者の会館への参与は後継者問題をある程度解決したが、会館はセブ華人社会やフィリピン広東系華人社会における影響力を以前ほどは有さなくなった。

最後に、セブ広東会館の現状について説明する。市川（1980）によると、1970 年代後半から、セブ広東会館と中国との交流が急速に発展していたことがわかった。同時にセブ市はフィリピン中部と南部に居住する広東系華人の交流の拠点としての役割を果たしていた。しかし、筆者の 2017 年および 2019 年の現地調査から見ると、セブ広東会館と中国との交流はここ数年で少なくなっており、また、セブ広東会館とフィリピンのその他の地域の広東会館との交流も次第に減ってきている。さらに、マニラにあるフィリピン広東僑団総会との交流も中止されており、会館の活動は活発には行われていない(15)。現在、日常的な会館の管理以外に、会館の主な活動は春節祭と春と秋の二回の祖先の祭祀だけである。

さらに、会館活動の減少だけではなく、会員同士の交流も少なくなった。かつて第一世代／第二世代の会員はよく広東会館に集まって談笑したり、麻雀したりしていた。セブ広東会館の建物は、セブ市内で華人の店舗とレストランが集まっているダウンタウンにある。中華料理屋において料理人あるいは店員として働く広東系華人は、昼食と夕食の間に休憩時間があり、よく広東会館でお茶を飲んで麻雀をする(16)。かつて会員たちは、出身地や移動の経路、家族構成、職業などを相互に知っていたが、現在では会員同士に距離感があり、あまり広東会館に行かず、交流が少ない。

筆者が、セブ広東会館で行われた祖先祭祀（2019 年 10 月 27 日）と春節祭（2020 年 1 月 26 日）に参加した時に気づいたのは、会員たちは一緒に活動を参加していたとしても、面識がなく、互いの名前すら呼ぶことができないことがよくあるということである。理事会メンバーに参加者のことを質問すると、「参加者は知らない人がほとんどだ」、「この人は広東系華人かどうか分からない。参加者の多くは見た目がフィリピン人と一緒だ」、「あの女性は誰かのフィリピン人妻だな。でも、父親は広東系華人で、混血児かもしれない」といった答えがよく聞かれた。つまり、セブ広東会館の会員とその家族のなかには、広東系華人らしい人もいれば、広東系華人らしくない人もいるのだと考えられる。それでは、広東系華人と呼ばれるのは誰なのだろうか。判断基準はなんだろうか。これはまさに、本稿の冒頭で提起された問題である。また、参加者によっても「広東系華人であること」に対する理解は異なっている。これらは彼らの人生経験と関係があるかもしれない。彼らの移動経験、父の世代から受け継いだ記憶およびセブでの定住経験は、彼らが「広東系華人であること」に対する理解を左右し、セブ広東系華人というカテゴリーの境界を構築している。したがって、次の第II章では、いくつかの「広東系華人」のライフストーリーを整理することによって、広東系華人と呼ばれることおよび「広東系華人であること」に対する理解を中心に、境界について考察する。

II　広東系華人のライフストーリーに関する事例

1．調査の概要

本章の事例は、筆者が 2019 年にセブ市で行った広東系華人に関する調査の結果である。セブ市での調査に先立ち、2017 年 12 月にダバオ市で広東系華人に関する調査をしていたところ、「菲律濱廣東僑團總會」（Philippine Federation of Filipino Cantonese Association）の理事である S さんと出会い、セブ広東系華人の状況を教えてもらうことができた。S さんによると、セブ広東系華人は徐々に減少し、セブ広東会館もすでに活動を中止しており、連絡が取れなくなったという。その後、筆者はセブ広東会館のウェブサイトやフェイスブックのページを探してみたが、有用な情報は得られなかった(17)。つまり、セブ広東系華人に対する現地調査を開始した時点では、現地の広東系華人やセブ広東会館と接点を持つことができていなかったのである。

2019 年 3 月 20 日から 3 月 25 日に筆者の指導教員である大阪大学の宮原曉教授と、同じ研究室の先輩である岡野翔太さんとともに、第 1 回目の現地調査を行った。宮原先生は長い間、セブ市で華人社会について研究を行っている。宮原先生を通して 3 月 21 日に現地の福建系華人 J さんたちと会い、セブ華人社会に関する情報を得た。セブ在住の広東系華人の状況を聞いたが、広東系華人の知り合いはおらず、会館はもうないかもしれないと言われた。その後、3 月 22 日（金）に J さんとランチに行くと、偶然にも J さんの友人タンさん（セブ福建系華人）と出会った。 タンさんは、妹の R さんは広東系華人だと述べた。彼に R さんを紹介してもらい、インタビューに行った（事例 5）。 R さんは、セブ広東会館はもう存在せず、他のセブ広東系華人の知り合いもいないと語った。

市川（1980）はセブ広東会館の所在地はコロンストリート（Colon St.）だと述べている。しかし、コロンストリートの周辺には小さな路地がたくさんあり、非常に複雑である。初めてセブを訪れた岡野さんと私にとってセブ広東会館を見つけることは難しかった。だから、宮原先生の後ろをついていって、歩きながら探すしかない。最初の 2 日間、実際に歩いて探しても、見つけられなかった。

写真１：セブ広東会館の建物

写真２：セブ広東会館が位置する路地

（いずれも筆者撮影（2019 年３月２３日）

3 日目の 3 月 23 日（土）には、狭い路地にあるセブ広東会館をようやく見つけることができた。午前 10 時頃から、コロンストリートと並行する J.C. Zamora St.を歩いた。この際、宮原先生は J.C. Zamora St. に狭い路地（写真２）を見つけた。 この路地はとても狭くて汚い道であり、初めてセブ市に来た外国人である筆者にとって、昼間でも少し怖く感じられた。路地に入るか

迷っていると、宮原先生から「行ってみよう」と言われ、私たちはこの路地に足を踏み入れた。少し歩くと、少し老朽化した大きな 3 階建ての建物の存在に気づいた。 見上げると、建物の外壁には赤い文字で、中国語で「宿務廣東會館」、英語で「Cebu Cantonese Association」と書かれていた（写真１）。やっと、セブ広東会館を見つけることができたが、会館の扉は閉まっていた。私たち 3 人は外国人であり、地元の方言であるセブアノ語も話せないので、いきなり訪問しても不審者だと思われるかもしれない。そのため、翌日の日曜日に、現地に暮らす宮原先生の友人 A さんとともに訪問してみることにした。

３月 24 日（日）の朝、ホテル前で A さんと合流し、前日に見つけたセブ広東会館を訪ねた。門を叩くと管理人から「午後 3 時過ぎに来てください」と言われたので、午後 3 時に再び訪ねると、今回は無事にセブ広東会館に入ることができた。会館に入ると、麻雀テーブルの前で何人かのお年寄りが麻雀をしていた。対応してくれたのは理事会のメンバーの H さん（事例３）と D さん（事例４）であった。二人は突然の訪問に対して、最初は警戒心を示していたおり、特に大学教員の D さんは警戒していた。D さんからは、もし調査研究を行うなら、詳細な研究計画を提出して状況を説明してほしいと言われた。当時彼は救命センターの救急救命士であったＨさんは D さんより親切であった。私たちはＨさんから会館の歴史および中国人民共和国との交流について紹介してもらった。また、中国駐セブ総領事館が設立される前には広東会館は中国へのビザを代行する機能があったことも教えてくれた。彼らは、中国語あるいは広東語を話せず、読めないが、広東系華人だという高いプライドを持っていると表現していた。最後に次の機会に研究計画書を提供することを約束すると、H さんと D さんは筆者らの訪問とこれからの研究について理事会に伝えてみると言った。理事会から同意が得られれば、その後、セブ広東会館に関する調査を行うことができると言われた。

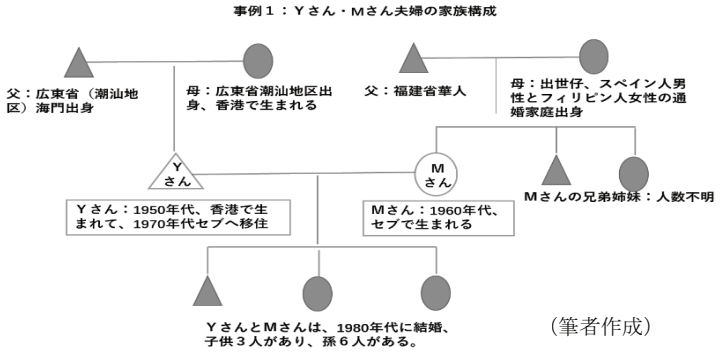
翌日の 25 日、宮原先生と岡野さんはセブから日本に戻り、私も 26 日にダバオ市へも戻って広東系華人について調査を行った。その後、H さんの協力を得て、4 月になってから理事長のＹさん（事例１）と連絡を取った。理事会から同意が得られてから、広東会館を訪問し、会館の活動に参加した。その後、2019 年の 6 月、10 月、2020 年 1 月にもセブ市で現地調査を行い、セブ広東会館の活動に参加した。この間に他のセブ広東系華人とも出会った。特にＹさんの妻のＭさん（事例１）、女性会員の E さん（事例２）とよく話をすることができた。

以下の事例 1 から事例 4 では、セブ広東会館のメンバーを中心に取り上げ、「広東系華人」と呼び得る状況を示した。事例 1 のＹさんは、広東人の家庭で生まれ、広東語を話し、華人文化にある程度の了解があるので、自分自身は「純粋な広東系華人」だと思っている。しかし、セブ広東系華人コミュニティのなかでは、広東人の男性とフィリピン人の女性が結婚して、混血児を育てる家庭が一般的になっている。事例 2 から事例 4 では混血児の経歴を記述した。彼らにとって、「広東系華人であること」に対する理解は、事例１のＹさんのように明確ではなく、不確定なところが多い。事例 5 では「広東系華人」と「福建系華人」との区別に注目し、福建系華人家庭で生まれたが「広東系華人」と呼ばれ、自分もそのアイデンティティを認めているという事例を取り上げる。

２．事例

事例１：Ｙさん・M さん夫婦：Y さん（男性、60 代、元レストランの経営者、インタビューの言語――広東語）、Mさん（女性、50 代 、主婦、インタビューの言語――英語）

Y さんはセブ広東会館理事会の理事の一人である。彼には「Pure Cantonese」という彼自身が繰り返し言及していたラベルを付与できるかもしれない。Y さんは、混血ではない、ごく少数の純粋な広東人だと言っていた。また、Y さんは現在の理事会メンバーのなかで唯一、流暢な広東語を話すことができる。面白いことに、Y さんが使っている広東語は、セブ広東系華人のなかで最も一般的な「四邑系」広東語ではなく、「広府系」広東語である。これは彼の来歴と関係がある。



（筆者作成）

Y さんの家族は広東省東部の潮汕地域の海門から来た。この地域の人は「潮州話」（閩南語の下位方言）を使用している。海門は海の出口である。第二次世界大戦中、Y さんの父は日本軍に捕まり、フィリピンに連れて行かれたが、幸いにも父は戦火から生き延びた。最初はマニラに来て、福建人が経営する店で働いた。その後、セブで福建系華人と雑貨店を共同経営した。母と父は同郷で、広東省潮汕地域出身である。母は小さい時から香港で育ち、6 人の兄弟がいる。母方の祖父は早く亡くなり、母方の祖母が一人で裕福な家庭の家政婦として働いて子供を育てた。父は、知人の紹介で香港にいる女性と婚約した。当時、父は雑貨店の共同経営を始めたばかりで、経済的な条件もあまりよくなかったので、母と結婚した後もそれぞれセブと香港に住んでいた。

Y さんは 1957 年に香港で生まれ、「潮商学校」（香港潮州商會が創立した学校）に通った。中学卒業後、父にセブに連れて来られた。セブに行っても現地の学校に進学せず、父が家庭教師を頼んで英語の勉強を教えてもらった。地元の生活に慣れてきたら、Y さんはまず父の雑貨店の商売を手伝った。その後、精米屋の商売を始めた。店の近くに大きな精米屋があり、経営者は広東台山出身の華人の L さんである。L さんの紹介によって、1987 年に Y さんもセブ広東会館の会員になった。しかし、Y さんの父は広東会館の会員ではなく、広東系華人というよりも、「潮州系華人」と自己認識しているようである。

この頃、Y さんは地元出身の M さんと結婚した。M さんは裕福な家庭に生まれた。M さんの父は福建系華人で、母はスペイン人とフィリピン人のハーフである。Y さんは性格が朗らかで、人との付き合いが上手であり、商売も順調である。その後、飲食業にも足を踏み入れて、セブで何軒か有名なレストランを経営している。

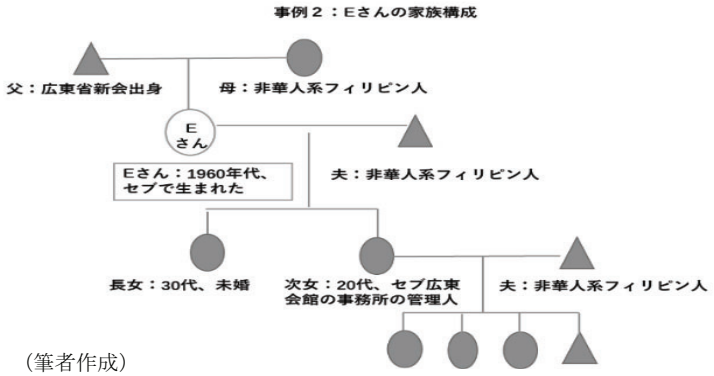
また、1990 年代からセブ広東会館は若手会員の不足という問題に直面していた。Y さんは当時珍しい若手会員で、しかも活躍して理事会のメンバーになった。特に 1995 年に中国駐セブ総領事館が設立されて以後、領事館や中国広東省人民政府僑務弁公室との交流を盛んに行っていた。担当者として、中国広東省への帰省を何度も主催した。特にここ十年来、理事会のメンバーは Y さんを除くと、他の人は地元で生まれ育ったハーフであり、広東系華人の文化と言語についてわからないことが多い。そのため、会館において Y さんは明らかに重要な存在であり、尊敬されている。

現在、妻の M さんも広東会館のなかで役職を務め、会館の財務を管理している。彼女は広東人の子孫ではないが、会館の入会規定により、男性会員の配偶者として会員になることができる。理事会のメンバーの一人だが、彼女も広東系華人の状況をよく知らないようである。Y さん

と M さんの子供はもう結婚して子供もいるが、子供は広東会館に入っておらず、会館の活動にも熱心ではない。ただ、娘がまだ子供であった数年前、歌が上手だった娘はよく会館のイベントで歌を歌っていた。数年前、Y さんは病気で入院して手術を受け、商売は全部辞めてしまった。しかし夫婦は引き続き広東会館で理事を務めている。

事例２：E さん（女性、60 代 、事務員、インタビューの言語――英語）

混血児であり、女性でもある E さんのライフストーリーから、広東系華人社会における女性の「帰属」の不安定さを説明する。特に非広東系華人の男性と結婚すると、広東系華人の一員としての権利を一部失う可能性があるという点を述べる。



（筆者作成）

E さんは移民第二世代。父は第一世代の広東系華人で、母はフィリピンの女性である。父の本籍は広東省の新会であり、4 人の兄弟姉妹の 2 番目である。

移民第一世代の父は 1922 年に生まれた。フィリピンに移住するために、1936 年頃、父は身分証明書を買った。この身分証明書で正式に登録されているのは、セブ在住広東系華人の L さんであり、L さんは書類上の E さんの父方の祖父となった。L さんはセブで大きな精米工場を経営しており、父はそこで働いていた。父は母と結婚した後、広東会館の貸間に住んでいる。E さんは一人娘で、父と一緒に中国に 4 回行ったことがある（1984 年、1987 年、1990 年、1994 年）。

E さんは小学生の頃、「宿務東方学院」（華僑学校）に通っていたが、それほど長い期間ではなかったので、中国語の読み書き能力は低い。広東語では、日常会話において「早晨」（zou^{2}san^{4}――おはようございます）や「食咗飯未」（sik^{6} zo^{2} faan^{6} mei^{6}――ご飯を食べるか）等と言える程度である。しかし、筆者に会うたびに広東語で挨拶してくれたので、E さんはできるだけ広東語を使って筆者と話をした。

E さんの夫はフィリピン人で、デザインの仕事をしていた。しかし 10 年前に突然病気で半身不随になり、仕事を続けられなくなった。今は E さん一人で働いている。彼女はセブ市内の病院で症例などのデータをコンピューターに入力する仕事をしている。収入はそれほど多くはない。E さんと夫には娘が二人いる。長女は英語教師として日本に住んでいる。日本に行く前にはセブで英語を教えていたが、E さんの友人から経済援助を受けて、数年前に日本の語学学校に入学した。

E さんは 1994 年に会館の正式会員になり、熱心に会館の活動に取り組んでいる。E さん一家は広東会館理事会の各メンバーと仲がよいと言える。次女は現在、セブ広東会館の事務所の管理人として文書管理も行っており、フィリピン人の夫と 4 人の子供と一緒に会館内の管理人室に住んでいる。

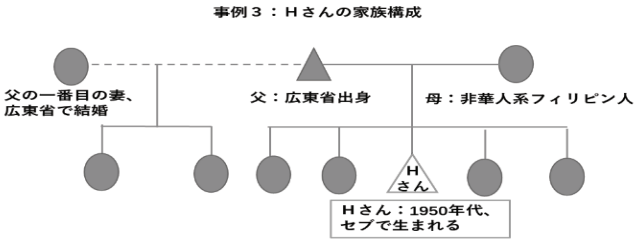
2021 年上旬に E さんの夫が病気で亡くなった。広東会館が保有する義山（墓地のこと）は会員とその家族に無料で提供されているので、E さんは墓地の使用を求めていた。しかし、会館の規定では、会員および男性会員の配偶者と子供だけが会館の墓地を利用できることになってい

るため、E さんの夫の墓地の使用は会館から拒否された。E さん自身は会館の墓地を使うことができるが、夫は広東系の華人ではなくフィリピン人なので、夫と子供は墓地を使えない。経済状況が特に良くないので、E さん一家は会館や理事会に何度もお願いしたが、最後には断られた。結局他の有料墓地を探した。

事例３：Hさん（男性、60 代 、元救急救命士、インタビューの言語−−英語）

H さんが代表するのは、一部の人からは「純粋ではない」と言われているが、自己は「広東系華人」として認識している混血児たちである。また、彼のライフストーリーからは、広東系華人社会のなかでしばしば見られる「二重家族」と「再移民」（主に北米へ移住）という現象が示されている。

H さんとの出会いはセブ広東会館を初めて訪れた時であった。その後、2019 年 10 月のセブ広東会館の祖先祭祀の際に、H さんは、筆者が指導教員とともに初めて訪問した日のことを振り返りながら、筆者はラッキーだと言った。H さんは、「私たちみたいなハーフは、1/2 がフィリピン人です。人と話したり、シェアしたりしたいです。昔の広東会館のお年寄りはそうではありませんでした。この前教授と一緒に訪問しに来た時、幸いにも私たちは会館にいました。お年寄りは、絶対にインタビューを断ります。自分の話をしたくないです。中国人とか韓国人とか日本人も全部このようですね。でも、私たちにはフィリピン人の性格がありますので、違います」と言った。



（筆者作成）

H さんの父は移民第一世代で、広東にいる時にすでに結婚して、二人の娘がいた。最初の家族の妻と娘たちはその後香港に行って、そしてアメリカに移住した。

H さんの母はフィリピン人である。H さんは 5 人兄弟の 3 番目で、唯一の息子である。姉と妹二人はもうアメリカにいる。以前からアメリカにいる姉が移民の申請を手伝ってくれた。約 22 年待ち、2019 年にやっと審査を通過した。今後は彼が母と姉と三人でアメリカに行くことにしている。彼らは姉がいるアリゾナ州（Province of Arizona）のフェニックス（City of Phoenix）へ行って、姉のところで住むつもりである。

H さんによると、父は生前アメリカに行ったこともあった。姉の一人はニューヨークで中華料理屋を経営していたが、義兄は料理ができないので、父が手伝いに行った。でも父が行った時は冬で、寒くて手にしもやけができた。そのため、父はすぐにセブに戻った。

H さんは父との仲の良さを思わせる表現を用いている。彼はよく広東義山に行って父のお墓参りをしている。彼は、父が思いがけず亡くなったので、突然のことで、最初は納得できなかったという。だから最初はほとんど毎日墓地に来て父を弔っていたが、現在は週に一回ぐらいになった。確かに、広東会館の義山の多くの墓石のなかで、H さんの父の墓は特に目立っており、とてもきれいで、花も供えられている。

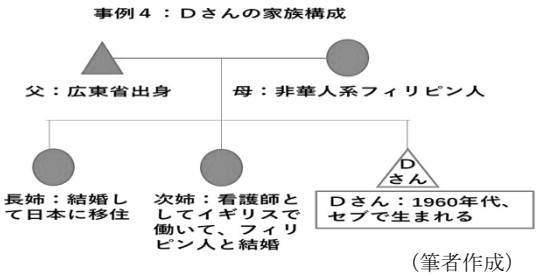
子供の時、H さんは「宿務東方学院」という華僑学校に通っていたが、その期間は長くなかったため、中国語はあまり話せなかった。しかし、彼は特にこのことを気にしていない。ただ、現在はセブの広東人コミュニティのなかで純粋な広東人は徐々に少なくなり、多くは混血児だ

と語った。彼はいつも広東会館の重要性を強調し、広東系華人たちがお互いに助け合うため会館を創ったと述べていた。H さんは、セブ広東会館の一員として誇らしさを感じていたようだ。

しかし、2019 年の年末に、移民ビザを取得した後、セブ広東系華人コミュニティに未練を抱きながらHさんは、アメリカに移民した。

事例４：Dさん（男性、50 代、大学教員、インタビューの言語――英語）

D さんは上記のHさんと同じ混血児であるが、成長期には華人文化にはほとんど触れられず、代わりにフィリピン人として成長した。この事例は「広東系華人」としてのアイデンティティが不確かな一部の広東系華人混血児の状況を説明している。



（筆者作成）

D さんは広東系華人の第二世代で、母がフィリピン人の混血児である。D さんによると、両親は結婚せず、同居生活をしているだけであった。ゆえに、彼は母を通じてフィリピン国籍を取得したが、父の姓を残している。

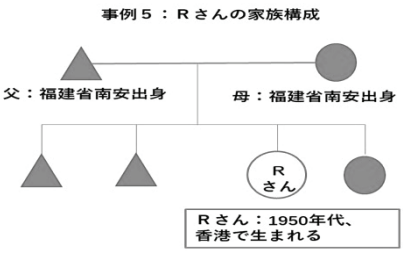
華人の子供だが、D さんは華人学校に通った経験がない。華僑学校は私立学校なので、学費が比較的高く、父は負担できなかったので、ずっとフィリピンの公立学校に通っていた。しかし、D さんは優秀で、大学を卒業してから大学教員になった。

D さんは父が「神秘的」だと思っている。父は中国に関する話を一度も言わなかったので、中国にいる時におそらく結婚しており、子供もいるのかもしれないと疑っている。父は広東会館の秘書をしていたので、家族は会館の貸間に住んでいた。現在、独身の D さんも会館の貸間に一人で住んでいる。両親はもう亡くなり、姉二人は日本とイギリスに住んでいる。

D さんは現在、セブ広東会館の会員で、理事会の理事の一人である。しかし、事例 3 の H さんと比べると、会館の活動にあまり熱心ではない。

事例５：R さん（女性、60 代、経営者、インタビューの言語――英語と広東語）

R さんとの出会いはとてもドラマチックであった。彼女は私がセブで知り合った最初のセブ「広東系華人」である。彼女は福建系華人の家庭に生まれたが、「広東系華人」とも呼ばれる福建系華人である。R さんの事例を通して、福建系華人を中心とするセブ華人社会のなかで、「出生地」という要素に基づいて人を分類されることが、どう考えられているのかを示している。



（筆者作成）

セブ市で 1 回目の現地調査をしていた時、福建系華人の J さんと地元のレストランで食事をしていると、偶然 J さんの友人の「タン」さんが現れた。彼は私たちがセブ在住の広東系華人を探していることを知っていて、自分の妹が Cantonese（広東系華人）で、広東語が話せると言った。しかし、困った点があった。タンさんは福建系華人と自称していたが、妹はどうして広東系華人なのだろうか。同父異母の妹なのだろうか。また、タンさんの苗字は、漢字で「陳」と書くのか、それとも「譚」と書くのだろうか。福建系華人なら、「タン」は閩南語の陳（Tan）の発音に対応する。広東語で発音すれば、「タン」は譚（Taam）に対応する。

筆者は、このような疑問を抱きながら、昼食後、タンさんの妹のRさんの住居を兼ねた店を訪ねた。R さんの両親は福建省の南安出身で、1940 年代の終わりに父はセブから南安に帰って母と結婚した。その後、父はすぐにセブに戻った。1950 年代に母はフィリピンへのビザを申請し、ビザを待っている間に香港に行き、暫くそこに住んでいた。R さんはこの期間に香港で生まれ育った。居住地は福建人が集中する北角というところであり、香港で生活しているうちに広東語を話せるようになった。しかし、セブに移住してからは、広東語をあまり話さず、現在も上手には話せない。小学校 3 年生の時に学生ビザでセブに来てからずっとここで暮らしている。

R さん家族の移動経験から見て、福建系華人という言い方は間違っていないと考えられる。しかし、R さん本人は「キャントニーズ」（Cantonese）だと認識している。セブに広東会館があるかと聞いたら、彼女は「もちろんないですよ。あれば必ず参加します」と答えた。

III　事例分析

上記の事例にはセブ広東系華人の移住と生活経験が記録されている。事例から気づくことは、「広東系華人」というカテゴリーは、様々な判断基準に基づいているということであり、基準の違いによって、縮小したり拡大したりし得るということである。 つまり、広東系華人というカテゴリーは、一貫した判断基準がなく、柔軟であると考えられる。 一方、他のカテゴリーとの区別については、彼らの間には強固な壁がなく、むしろ透過性が高い境界が構築されている。本章では、上記の事例をもとに、広東系華人というカテゴリーの柔軟性および他のカテゴリーと区別から、広東系華人というカテゴリーの境界透過性を論じる。

1.　「広東系華人」というカテゴリーの柔軟性

セブ華人社会のなかで、広東系華人というカテゴリーについてどんな判断基準が存在するだろか。このために、以下では、それぞれの事例で紹介した広東系華人と呼ばれる人々が、広東系華人と呼ばれる理由および呼ばれない理由を本人の視点と他者の視点から整理した（表 1）。

表 1 によると、「広東系華人」と呼ばれる理由については、本人の視点であっても、他者の視点からでも、血縁が出現頻度が最も高い理由であり、そこに地縁と言語が続く。しかし、血縁や地縁や言語に基づいた場合、すべての事例を解析することはできない。 広東系華人というカテゴリーについての判断基準は一貫性を欠いている。このことについて、事例と表 1 に基づいて論じてみたい。

1. 血縁に基づくと、事例 1 の Y さんおよび事例 2 から事例 4 の混血児たちは、広東系華人と呼ばれる。特に事例 1 の Y さんは、自分は混血児と比べると純粋な広東系華人だと思っている。また、ここで論じる「血縁」は生物学の血縁 consanguinity ではなくで、社会人類学的血縁 kinship（中根 2002: 79-80）である。事例 1 のMさんは広東系華人の「血」を持っていないが、広東系華人と呼ばれている。これは、広東系華人男性と結婚して、広東系華人子孫の母になったからである。しかし、これでは、福建系華人の家庭の第二世代であるＲさんの事例を説明できない。Ｒさんは広東系華人の「血」を持っておらず、結婚対象も非広東系華人だが、広東系華人と呼ばれる。

２．地縁に基づくと、広東省からフィリピンに移住した中国系移民とこの子孫も、中国地方行政区画の「省」を基準として広東系華人と呼ばれる。しかし、地縁を基準とすると、福建系華人家庭出身のＭさんとＲさんも広東系華人と呼ばれることは説明できない。

３．言語に基づくと、香港で生まれ育ったＹさんとＲさんだけは中国語の標準語と広東語の

読み書きができる。他の事例では、中国語の標準語と広東語が話せず、読み書きができない。しかし、基準となる言語は、どのようなレベルの言語だろうか。Ｙさんと R さんが話す広東語は、広東省のなかの一つの方言であり、省内全てで通用する共通語ではない。広東省の方言は、主に 4 つに分けられる(18)。

（1）珠江デルタ流域とその周辺地域を中心に広府人が使用する「広東語」（「粤語」とも呼ばれる）

（2）広東省東部を中心に客家人が使用する「客家話」

（3）広東省東部、福建省南部と隣の潮州、汕頭、揭陽を中心に潮汕人（潮州人とも呼ばれる）が使用する「潮州話」（閩南方言の下位方言）

（4）広東西南部雷州半島を中心に瓊人（海南人とも呼ばれるが、1988 年に海南島が広東省から独立し、海南省になった）が使用する「雷州話」

さらに細かい下位方言に基づいた下位カテゴリーにも分けられる。

上記のように、セブ広東系会館会員の出身地（図 2）は、8 割以上が四邑地域で、広東語の下位方言である「四邑系」広東語を使用するが、香港で生まれ育った Y さんと R さんは広東語の下位方言である「広府系」広東語を使用する。これらの方言に基づいて、それぞれのカテゴリーに分類することができる。

事例 1 のＹさんは、自分はより純粋な広東系華人の子孫だと主張しているが、父はセブ広東会館に入会しておらず、「広東系華人」ではなく「潮州系華人」だと認識しているようである。Y さんの父は、自分は独特な潮州文化に属していることを強調し、広府文化圏には属していないと考え、セブ広東会館にも入会しなかった。しかし、強い「潮州系華人アイデンティ」を持つ父と違って、Y さんには自分は「潮州人であること」と認識し、マニラにおける潮州系華人団体に入会したが、セブ広東会館にも入会して理事として活躍しており、「四邑」出身の広東系華人と仲良くしている。すなわち、Ｙさんの父にとって、「潮州系華人」は独立したカテゴリーであり、他の広東省出身者とは区別される。一方、Ｙさんにとっては「潮州系華人」は、他の広東省出身者と区別がなく、「潮州系華人」は「広東系華人」というより広いカテゴリーに含まれている。言い換えれば、「広東系華人」というカテゴリーには柔軟性があり、政治・文化・社会関係などの変化に応じて縮小あるいは拡大していった。

また、表 1 によると、本人の視点と他者の視点による判断基準には不一致がある。このことは、次の事例からわかる。事例 1 の M さんは、広東系華人の妻となったことで、広東系華人として分類されるようになる。しかし、彼女自身は、広東系華人というよりは、福建省華人だと自認している。 事例 2 で、強い広東系華人アイデンティティを持っている E さんは、非広東華人系フィリピン人と結婚した後、広東系華人というカテゴリーから部分的に除外された。混血である事例 4 の D さんは、父が広東系華人であるため、他者の視点に基づくと広東系華人として分類される。しかし、D さん自らの視点から見れば、広東系華人の「血」を持っているが、広東系華人社会の文化や言語に関する知識をあまり有しておらず、自分はフィリピン人として育ってきたと考えている。セブ広東会館に入会するのは、経済的に好都合だからである。したがって、広東系華人から部分的に除外された事例 2 の E さんと違って、D さんは自ら広東系華人のカテゴリーからはみ出そうとしている。

以上によると、広東系華人というカテゴリーの判断基準は一貫性に欠け、状況によって、血縁、地縁、言語の判断基準は部分的に無視することができ、一方、新しい判断基準（例えば出生地）を採用することで広東系華人というカテゴリーの範囲を拡大できる。これは、広東系華人というカテゴリーの柔軟性を表現する。しかしまた、統一され、安定した判断基準が存在せ

ず、自身と外部からの判断基準にズレが存在するため、広東系華人というカテゴリーは安定しておらず、境界の外にはみ出ていくこともあれば、外から境界のなかに迷う込むこともあり得る。

表１　事例からみる「広東系華人」

		「広東系華人」と呼ばれることについて（本人の視点）		「広東系華人」と呼ばれることについて（他者の視点）	
		「広東系華人」と呼ばれる理由	「広東系華人」と呼ばれない理由	「広東系華人」と呼ばれる理由	「広東系華人」と呼ばれない理由
事例１	Ｙさん(男性)	● 両親は広東省潮汕地域出身だが、省を基準として「広東系華人」と呼ばれる ● 混血ではない ● 香港で生まれ育ち、広東語を話せ、華人文化にある程度の理解がある		● 両親が広東系華人 ● 香港で生まれ育った ● 広東語を話せる	● 両親が潮汕地域出身 ● 父はセブ広東会館に入会しておらず、「広東系華人」ではなく「潮州系華人」と自認しているようである
	Ｍさん(女性)		● 福建系華人家庭で生まれた自分は広東系華人ではないと思う	● 広東系華人男性と結婚した	● 福建系華人家庭に生まれた「出世仔」
事例2	Eさん(女性)	● 広東語・中国語が話せず、読み書きができない混血児だが、広東系華人のアイデンティティを持つ		● 父が広東系華人	● 非華人系フィリピン男性と結婚した ● 広東語・中国語が話せず、読み書きができない
事例３	Hさん(男性)	● 広東語・中国語が話せず、読み書きができない混血児だが、広東系華人のアイデンティティを持つ		● 父は広東系華人	● 広東語・中国語が話せず、読み書きができない
事例４	Dさん(男性)	● 父は広東系華人だが、自分は広東人の「血」を持つ	● 広東系華人としてではなく、フィリピン人として育ったと思う ● セブ広東会館に入会するのは、経済的に好都合だから（非常に安い家賃で広東会館の部屋を借りられる）	● 父が広東系華人	● 華僑学校ではなく、フィリピン公立学校に通ったことで、非華人系フィリピン人として育った ● 広東語・中国語が話せず、読み書きができない
事例５	Rさん(女性)	● 両親は福建人だが、香港で生まれ育ち、広東語を話せる		● 香港で生まれ育った ● 広東語を話せる	● 両親は福建系華人 ● 福建系華人男性と結婚した

（本稿の事例に基づいて筆者作成）

2.　広東系華人の境界透過性

上述したように、事例分析に基づく検討を行うと、「広東系華人」というカテゴリーは状況に応じて縮小し拡大することができ、柔軟性があることがわかる。この場合は、広東系華人というカテゴリーの境界もそれに応じて変化すると考えられる。この変化は、主に広東系華人というカテゴリーの境界透過性に表れ、境界を越えることが可能になる。

カテゴリーの境界を越えることが可能になるための要因について、宮原（1998）はセブ華人社会のエスニック・バウンダリーに関する研究において、通婚を通じてエスニック・バウンダリーが再生されることを議論した。本稿のセブ広東系華人に関する事例は、非広東系華人と結婚するケースばかりであるが、それは広東系華人の境界に影響を与えている。特に女性の場合、

カテゴリーの境界を再構築し、新たなカテゴリーに分類される経験をしている。具体的には、事例 1 の M さんと事例 2 の E さんの経験に基づいて説明してみる。

事例 1 の M さんは、セブで生まれ育った福建系華人と「出世仔」の娘である。夫の Y さんを支えるために、M さんは広東会館に入会して、重要な管理の仕事を担当した。広東系華人の妻になることによって、M さんは夫が所属するカテゴリーに入ることになる。しかし、同じ女性であったとしても、事例 2 の E さんは異なる経験をしている。広東人移民の第二世代として、しかも一人娘として、彼女は順調に父から会館の会員という身分を継承した。E さんは「広東系華人であること」と認識しており、広東会館の活動にも熱心だが、会館からは「完全な認可」を受けていない。例えば E さんの娘と孫は会員身分を受け継ぐことができず、広東会館の一員にはなれない。E さんの夫が亡くなった時も、会館から無料で提供される墓地を使うことができなかった。広東会館の義山（墓地）は、広東系華人とその家族を対象に、墓地が必要な人を支援するため、亡くなった者を安置し、魂が安息され、子孫も常に礼拝に行くことができるように作られた場所である。

これは、華人女性にとってのアイデンティティの「従属性」と関係があるかもしれない。上記の事例 1 の Y さん夫婦と事例 2 の E さんの分析では、男性会員である Y さんは広東系華人に属さない M さんと結婚した。M さんは広東会館に入会して会員になり、理事を務めた。結婚を通じて、M さんは広東系華人の妻および広東系華人の子孫の母になり、血縁（kinship）を基準に広東系華人の家族として広東系華人というカテゴリーに入った。この場合、広東系華人というカテゴリーは拡大される。逆に女性会員の E さんは、広東会館の会員になる権利を父から引き継いでいる。しかし、彼女はフィリピン人と結婚したことによって、配偶者と子供は会員身分と墓地の使用権を獲得する権利を有していない。結婚によって、女性は元のカテゴリーを離れて、新しいカテゴリーに入った。これは、E さんの家族が、次第に広東系華人というカテゴリーの境界を越えて、そこから離れていっていることを暗示している。この場合、広東系華人というカテゴリーが縮小していると言える。

以上のように、結婚に際して、広東系華人というカテゴリーの境界は再形成される。しかし、通婚しない場合にも、カテゴリーの境界を越える事例が存在している。事例 5 は、この点をよく示していると考えられる。

事例 5 では、香港で生まれ育った福建系移民の第二世代 R さんのエピソードを記した。福建系華人の子孫として血縁の絆は変わるものではなく、R さんは「福建系華人であること」と「広東系華人であること」を同時に自認する。セブで育った兄のタンさんと異なり、R さんは香港で生まれ育った。福建人移民が集まる香港の北角に住んでいたが、生まれた香港の言語、文化、生活といった経験はすべて R さんの成長過程のなかで重要な養分となっている。ゆえに、R さんは、香港で育ち、香港本土で最も通用する言葉の広東語を話すことができる自分は Cantonese（広東人）だと考えている。

R さんは広東系華人の境界を越えていると考えられる。この事例は、フィリピン華人社会における「出生地決定論」と関係があり、影響を受けているのかもしれない。「出生地決定論」は、血統で国民を分類するのではなく、出生地から判断する。つまり、広東人と呼ばれるのは、広東人の両親から生まれた者ではなく、広東省で生まれ育った者である。出生地決定論が華人の価値観に与える影響は、フィリピンの植民地時代に、植民地政府がフィリピン諸島における華人を含む人々を分類した際の、種族、エスニック・グループの認定に関係している。これに関連する分類基準には、主に出生地主義と血統主義がある。フィリピン独立前の 19 世紀末から 20 世紀前半までのアメリカの植民地期には、フィリピンでは華人と子孫の分類について、出生

地決定論を採用する傾向があった。Aguilar Jr.（2011）は、1899 年から 1947 年のフィリピン最高裁判所の判決文書と国籍に関する法律の分析に基づいて、華人の分類と公民権について考察した。この時期、華人の男性とフィリピン人の女性による通婚家庭出身の混血児は、一般的に、フィリピンで生まれた後、幼少期に中国に連れて行かれ、そこで勉強することになる。その後、10 代もしくは大人になってからフィリピンに戻る時には、身分認定の問題が生じた。フィリピン人としては入国できるが、華人としては 「排華法案」に規定されたいくつかの身分でなければ入国できない(19)。この時期、関連法案は何度も改正されたが、基本的には出生地の原則を基準としている。フィリピンで生まれた華人の混血児（Chinese mestizo）だけでなく、フィリピンで生まれた両親が華人の非混血児も、フィリピン人として認定される。1939 年の改正帰化法は、血統主義を採用して、出生地主義を廃止した。しかし、自由と権利の重要性から考えて、出生地主義の再導入を支持する者が継続して存在する。1972 年にフィリピン憲法制定会議（constitutional convention）は、出生地主義の再導入を試みた。結局、この案は通過しなかったが、フィリピンの華人、特にフィリピンで生まれた華人にとって、出生地主義が採用されることは彼らの権利を擁護することにつながると考えられていた。華人社会における人の分類と区分に影響を与える出生地主義の原則を考慮すると、両親が福建系華人である R さんが広東系華人に分類されることもよく理解できる。

以上のように、広東系華人というカテゴリーの境界透過性は比較的高く、内部一致性は低いと考えられる。境界に穴があり、他のカテゴリーとの間にハードな壁がない。カテゴリーの内外で通行ができ、相互作用も可能なのである。図 3 は、個人のアイデンティティと組織のアイデンティティについて境界という視点から論じた Kreiner, Hollensbe & Sheep（2006: 1321）の図を参考に筆者が作成したものである。

おわりに

本稿では、セブ広東系華人のライフストーリーを通じて広東系華人というカテゴリーの「境界透過性」を論じた。そこから、以下の 2 つの特徴を見いだした。1.「広東系華人」というカテゴリーは政治、文化、社会関係などの要素に応じて拡大し縮小することができ、一貫性がないが柔軟性がある。2. 華人女性の有するアイデンティティの「従属性」、混血児が抱くアイデンティティの「不純粋性」および「出生地中心論」の影響を考慮すると、広東系華人というカテゴリーの境界は越えることができるものである。セブ華人社会のなかで、広東系華人と福建系華人との境界は堅固ではなく、比較的高い透過性を持っており、内部の特徴をそれほど固辞せず、外部からの影響を受けやすいと考えられる。

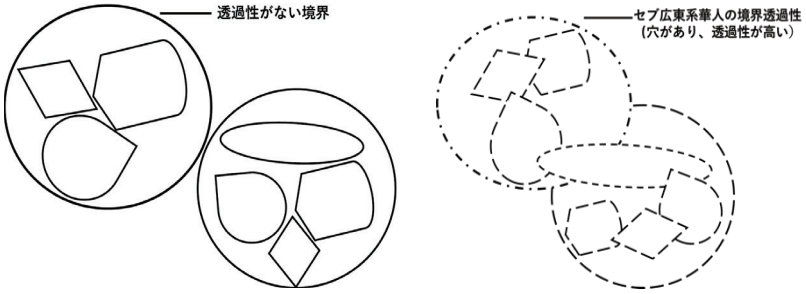


図 3 セブ広東系華人の境界透過性
（Kreiner, Hollensbe & Sheep（2006: 1321）の図を参考に筆者

本稿の冒頭で述べた Barth のエスニック・バウンダリーに関する理論は、エスニック・バウンダリーによってアイデンティティが維持されることを指摘している。つまり、エスニック・バ

ウンダリーの変化はエスニック・アイデンティティに影響を与える。上記の広東系華人というカテゴリーの境界に関する考察に基づくと「広東系華人であること」は完全で変えられない単一のアイデンティティではないと考えられる。Ｙさんのように「広東系華人であること」と「潮州系華人であること」は同時に認識することができる。同じことは、Ｒさんにとっての「福建系華人であること」あるいはDさんにとっての「フィリピン人であること」も、「広東系華人であること」と相互に影響し合っている。また、結婚の場合、福建系華人アイデンティティを自認する女性（Ｍさん）が広東系華人の範疇に含められ、一方、広東系華人アイデンティティを自認する女性（Ｅさん）が排除されることもある。

華人社会では、このようなアイデンティティが交錯し、複数のアイデンティティを持っている状況については、多くの関連する研究があるが、ここでは詳しく述べない。しかし、筆者は、セブ広東系華人の事例は、「複数性」よりも「部分性」があるという特徴を有していると考えている。前者はアイデンティティの多重性と平行性を強調する。一方、後者は広東系華人アイデンティティを「自己」アイデンティティの一部として抱き、他の部分のアイデンティティと分離されるのではなく、相互に影響するものととらえる。セブ広東系華人アイデンティティの「部分性」については、次稿において引き続き論じていきたい。

付記　本稿を執筆するにあたり、大阪大学教授宮原曉先生、同講師白石奈津子先生にはご指導とご助言を頂いた。並びに査読者の方々に貴重な教示を頂いた。ここに記して深謝の意を表する。本研究に協力してくださり、貴重な資料を提供してくださったセブ広東会館、「菲律濱廣東僑團總會」の皆様に深くお礼申し上げる。

注

(1) 本稿では、「華僑」、「華人」、「中国系移民」などの語は区別をせず、「華人」によってすべての中国移民の第一世代とその子孫を示す。

(2) ここで言う「福建系華人という中心」とは、「研究者は研究を始める時、特に福建系華人を研究対象として研究を行う」という意味ではない。筆者が主張したいのは、研究者が「フィリピン華人」を研究対象として研究を展開すると、マジョリティとしての福建系華人の経験が中心に捉えられ、さらに、このような「中心」の経験を「全体化」しやすくなり、華人のなかのマイノリティーの経験が等閑視されるということである。

(3) 2020 年現在、フィリピンの総人口は約 1 億 900 万人。中国系の住民は総人口の約 1.2%～1.5%（Teresita Ang See 2005: 763）。*2020 Census of Population and Housing* https://psa.gov.ph/content/2020-census-population-and-housing-2020-cph-population-counts-declared-official-president、2021 年 9 月 28 日参照。

(4) *Population 2020 Census of Population and Housing* https://psa.gov.ph/population-and-housing/node/165020、2021 年 9 月 28 日参照。

(5) この流説は、2019 年 3 月にセブ市での現地調査の際、地元の華人たちから教えてもらった。

(6) 「マカオス」（Macaos）とも呼ばれる。

(7) 2010《旅菲粤僑光輝史：菲律濱廣東僑團總會創會六十週年鑽禧記念特刊 1950-2010》。

(8) セブ広東会館が 2010 年に作成した歴史紹介資料による。

(9) セブ広東会館が 2010 年に作成した歴史紹介資料、および市川（1980）による。

(10) 2019 年 6 月 23 日に実施したセブ広東会館理事会の理事長へのインタビューに基づく。

(11) 2019 年 6 月 23 日に実施したセブ広東会館理事会の理事長へのインタビューによると、広東

会館への入会は一般的にこの流れに従っている。理事長本人が 1980 年代に入会した時もこの方式で進行した。しかし、新しく入会する人数が少なくなるにつれて、会員を集めるために、入会方法も簡略化されている。

(12) セブ広東会館会員に関する資料については、セブ広東会館が所蔵しており、1950 年からの会員資料を含めて 267 件が含まれている。説明が必要なのは、会員番号から見て登録された会員は少なくとも 744 人いるが、会館に預けられた会員証は 267 件しか残っていないという点である。本文における統計は、この 267 件の会員証をもとに示した。また、第二次世界大戦中に会館の建物が被害を受け、多くの資料が破壊された。現存する最も古いメンバーの資料は、戦後会館が再建され、活動が再開された後の 1950 年に提出されたもので、最も新しい入会資料は 1995 年 1 月 28 日に提出されたものである。

(13) 広東省における方言についての詳しい内容は千島（2007）を参照。

(14) この統計結果は、2019 年にセブの現地調査に基づいて集計された。

(15) 筆者が 2017 年 12 月にダバオ市で、2019 年 8 月にマニラ市で実施した「菲律濱廣東僑團總會」の理事会の方々に対するインタビューに基づく。

(16) 筆者が 2019 年 6 月と 10 月にセブ市で実施したセブ広東会館のＨさんに対するインタビューに基づく。

(17) フィリピンの華人団体では、SNS の公式アカウントが存在することはそれほど珍しいことではない。例えば、マニラ広東僑団総会、ダバオ広東会館、イロイロ広東会館などは、Facebook の公式アカウントを有しており、頻繁に会館に関する情報をシェアしている。

(18) 言語の分類に関しては可児、斯波、游（編）（2002: 60、167～169）を参考にした。

(19) アメリカ植民地期には、アメリカ合衆国における「中国人排斥法」（*Chinese Exclusion Act*、1882 年）をフィリピンに導入がされ、華工（中国人労働者）の入国を禁止した。

引用・参照文献

欧文文献

Aguilar Jr. , Filomeno V.　2011 “Between the Letter and Spirit of the Law: Ethnic Chinese and Philippine Citizenship by Jus Soli, 1899-1947,” *Southeast Asian Studies*, 49(3):431-463.

Alejandrino, Clark L.　2010 “The Population History of the Chinese in the Philippines: An evaluative historiography,” *Philippine Population Review*, 9(1): 85-108.

Barth , Fredrik　1969 “Introduction,” In Barth , Fredrik (eds) *Ethnic Groups and Boundaries：the Social Organization of Culture Difference*. Boston: Little Brown and Company, 9-38.

Cheong, Caoline Mar Wai Jong 1983 *The Chinese-Cantonese Family in Manila: A Study in Culture and Education*. Manila: Centro Escolar University Research and Development Center.

Fenner, Bruce L. 1985 *Cebu Under the Spanish Flag(1521－1896): An Economic and Social History*. Cebu, Philippines：San Carlos Publications.

Fernandez, Yvette 2011 *Big John: The Life Story of John Gokongwei Jr.*. Cebu: Summit Publishing Company Inc.

Hall, Douglas T. & Richter, Judith 1988 “Balancing work life and home life: What can organizations do to help,” *The Academy of Management Executive* (1987-1989),2(3): 213-223.

Kreiner, Glen E., Hollensbe, Elaine C. & Sheep, Mathew L.　2006 “On the edge of identity: Boundary dynamics at the interface of individual and organizational identities,” *Human Relations*, 59(10): 1315-1341.

See, Chinben　1988 “Chinese Organization and Ethnic Identity in the Philippines,” In Jenifer Cushman and Wang Gungwu(eds.) *Changing Identities of the Southeast Asian Chinese Since*

World War II. Hong Kong: Hong Kong University Press, 328-329.
See, Meah Ang 2018 "The Tsinoy Sugbuanons: Cogs in Cebu's Wheel of Progress," https://tulay.ph/2018/08/07/the-tsinoy-sugbuanons-cogs-in-cebus-wheel-of-progress/, 2021 年 9 月 29 日参照。
See , Teresita Ang　1997 "The Ethnic Chinese as Filipino," In See , Teresita Ang *The Chinese in the Philippines: Problems and Perspective VolumeII*. Manila: Kaisa Para sa Kaunlaran, Inc., 24-68.
——2004 "Culture Persistence and Change: The Case of the Tsinoy," In See , Teresita Ang *Chinese in the Philippines Volume III*. Manila: KAISA PARA SA KAUNLARAN,INC., 157-165.
—— 2005 "Chinese in the Philippines," In *Encyclopedia of Diasporas, Immigrant and Refugee Cultures Around the World*. Springer US, 760-769.
Wang, Gungwu　1981 "Note on the Origins of Hua-Qiao," In Wang, Gungwu *Community and Nation: Essays on Southeast Asia and The Chinese*. Singapore: Heinemann Educational Books(Asia), 118-127.

和文文献

綾部恒雄　1986「移民・少数民族・民族集団——少数民族論の展開とエスニシティ論」『アメリカ研究』20、1-14 頁。
市川信愛　1980「フィリピン華僑の動向——セブ市広東会館を中心として」『研究年報』21、77-89 頁。
王崧興　1987 「漢人の家族と社会」伊藤亜人・関本照夫・船曳建夫（編）『現代の社会人類学 I 親族と社会の構造』東京大学出版会 、25-42 頁。
可児弘明 、斯波義信、游仲勲（編）　2002『華僑・華人事典』弘文堂。
片岡樹　2007「『ラフであること』の本質？——東南アジア大陸部山地民の民族帰属認知における柔軟性をめぐって」『文化人類学』（日本文化人類学会）71（4 ）、437-457 頁。
千島英一　2007「香港広東語の研究——語彙と言語文化を中心に」金沢大学大学院社会環境科学研究科博士論文。
陳天璽　2010「 華人の移動とその目的 : 世代・地域別比較の試み」塚田誠之（編）『中国国境地域の移動と交流 : 近現代中国の南と北』有志舎、15-44 頁。
中根千枝　2002『社会人類学——アジア諸社会の考察』講談社学術文庫。
宮原曉　1996「"lan lang"と"lumad"の間——フィリピンの国民統合における中国系フィリピン人の位置づけをめぐって」『第 1 回フィリピン研究会全国フォーラム抄録集』、77-89 頁。
——　1998「通婚とエスニック・バウンダリー——フィリピン・セブ市の華人社会の事例から」『アジア経済 』39(10)、26-52 頁。

中文文献

陳列甫　1968《菲律賓的民族文化與華僑同化問題》（台北）中正書局。
陈志明　2002<族群的名称与族群研究>, 《西北民族研究》1、48-54 页。
—— 2012《迁徙、家乡于认同——文化比较视野下的海外华人研究》（北京）商务印书馆。
龚伯洪　2003《广府华侨华人史》（广州）广东高等教育出版社。
刘海峰　2017<状元筹、中秋博饼与科举习俗的现代遗存>,《厦门大学学报(哲学社会科学版)》2、56-64 页。
施振民　1992<菲律賓華人文化的持續>,洪玉華（編）《華人移民：施振民教授紀念文集》（馬尼

拉）菲律賓華裔青年聯合會拉刹大學中國研究中心。
王賡武　1994《中國與海外華人》（香港）商務印書館。
徐作生　2015<林鳳拓殖馮嘉施蘭國遺跡踏勘>,《“一国两制”研究》4、191-199 页。
朱东芹　2016<闽南侨乡新移民:形成、分期与特点>,《南洋问题研究》1、86-98 页。
庄国土　2002<略论东南华族的族群认同及其发展趋势>,《厦门大学学报》5、第 63-71 页。
——2020 <21 世纪前期世界华侨华人新变化评析>,《华侨华人蓝皮书：华侨华人研究报告（2020）》（北京）社会科学文献出版社。
張廷茂　1996<東南亞與明末澳門海上貿易>,《文化雜誌》27-28、45-53 頁。